

# 秋月悌次郎の公用局復帰

中西達治

四四

はじめに

本稿では、秋月悌次郎が、蝦夷から呼び戻され、京都で会津藩公用局に復帰するまでのいきさつと、その後について考察する。参考資料等についてはその都度本文中に記した。

一 慶応二年十一月、悶々の思いで任地での職務を果たしていた彼に、京都の会津藩関係者から至急上京するようにという命令が届いた。悌次郎は十二月三日斜里を出発した。酷寒のこの時期の旅は異例である。悌次郎の心の高ぶりが知られる。『韋軒遺稿』には、次の詩が収載されている。

慶応二年十二月。自京 慶応二年十二月、京都よりの飛書、  
都飛書徴予。至舍麻尼 予を徴す。舍麻尼に至れば則ち歳已  
則歳已尽。丁卯春日、 に尽く。慶応三年春、久寿里への途  
久寿里途中作。 中作。

沍寒墮指雪為層。 沍寒指を墮し、雪は層を為す。  
聞説吏人過未曾。 聞くならく吏人未だかつて過せずと。  
苦絶斯行亦奇絶。 苦絶の斯の行は、亦奇絶なり。  
春風跨馬涉堅氷。 春風馬に跨りて、堅氷を渉る。

斜里から舍麻尼（様似）を経て久寿里（釧路）に至るルートは、冬の間は交通が途絶する。それを敢えて出発したということで、悌次郎

の心の高ぶりがよく分かる。

上洛の途中彼は、仙台に立ち寄り、昌平齋の後輩岡鹿門を訪ねた。この時のことは、岡鹿門の『在臆話記』に詳しい。それによれば、悌次郎と同じ仙台藩士の儒者氏家晋の近況を尋ねたので、ふだん岡には世俗の藩学者とは交流がなかったけれども迎えを出した。当時仙台藩の学問は、大槻盤溪の指導のもと洋学をも視野に入れ開明的であった。盤溪は佐幕開国を推進し、天皇のもとで委託を受けた幕府が政権を運営するという、後に徳川慶喜が考えた大政奉還後の政権に近い考えを持つており、尊王攘夷論者だった岡とは思想的に隔たりがあったということだろう。

やってきた氏家が、玉虫左太夫（文政六・一八二三年生まれ）が数日前に長崎から帰ってきているという。秋月が、  
此ハ妙也。余ハ北役以来、今日始メテ内地ノ諸友ニ面会、上国諸藩ノ実歴談ヲ以テ京都土産ニセン  
というので、早速呼び寄せて対談に及んだという。

玉虫は、江戸でペリー艦隊との交渉役だった林復斎に学び、安政三年には、仙台藩領となった蝦夷地を視察、安政七年には咸臨丸で渡米するという経歴の持ち主である。

玉虫は、秋月と同様佐幕論者で、岡とは考え方が異なるが、彼の報告は、「薩長ハ野心、佐賀ハ日和見、熊本ハ幕府ト憂喜ヲ同フスル等」

意外な新情報が多かった。玉虫と秋月とは、「天朝ヲ尊奉、幕府ニ恭順、左ナケレバ天下ヲ誤マル」と意見が一致したが、岡は、水戸藩の安政の大獄以来の藩論の動揺を例にあげて

天朝ヲ尊奉セバ幕府ニ不恭順、幕府ニ恭順ナレバ天朝ニ不尊奉、  
兩者不<sub>レ</sub>並立<sub>一</sub>、此ハ孟子ニ云フニ<sub>三</sub>其本<sub>一</sub>ノ故也。然ラバ天下  
ノ一二定マルハ、此兩者ノ並立ザル、其一ヲ除ク外ナシ

朝廷と幕府とは両立出来ない、天下を統一するにはどちらかを除く外ない。と孟子の一節を引用して持論を展開、酒席は一瞬静まりかえり、酔いも覚めてしまった。夜も更けたのでその日はそのまま分かれたが気持ちがつつきりしない。岡は、我が家は彼らの路の途中にあるので明日また立ち寄るようにと言った。その夜は雪模様で翌日は一面の銀世界、荷物を先発させておいて彼らはやってきた。入り口には鹿兒島の重野安繹筆の扁額「草私史亭」がかけられてあり、文久三年の薩英戦争の処理にあたったおりの重野の態度に話が及んだ。秋月が時に近作の詩はないかと聞くので、岡は

朝候<sub>二</sub>相公門<sub>一</sub>、相公未<sub>レ</sub>起時、暮候<sub>二</sub>相公門<sub>一</sub>、有<sub>レ</sub>客相公辞、相  
公門前族<sub>二</sub>車馬<sub>一</sub>、相公堂上羅<sub>二</sub>珍奇<sub>一</sub>、誰知相公門外客、牛衣<sub>立</sub>  
寒幾年茲。

【大意】宰相様に意見具申をしようと思いついても、朝はまだ起きていらつしやらない、夕方には先客があると、面会は許されない。宰相様の御屋敷には人が群がり、珍しい献上品でいっぱいだが、門外でふるえながら待っている貧乏学者には会ってもらえない。という詩を見せた。これは、仙台藩が先にも見たとおり尊王佐幕の方向で動いているため、岡は忌避されていたということだろうが、この詩を見た秋月は、岡の肩をたたいて、

今二天下ノ事ハ、吾党双肩上ニ落カ、ル上ハ、其時迄不平ヲ鳴ラ  
サズ、寝テ待テ

やがて我々の出番が来るさ、それまでの辛抱だといって大笑いし、盃を重ねて分かれたという。

『在臆話記』には、この時秋月には手代木が同行していたとか、『終北録』に出てくる蝦夷の代官は秋月であるとか、妻を娶って上洛したとか明らかな間違いや実否の不確かな情報が記されていて、注意が必要であるが、ここに記したことがらについては、蝦夷から帰任の途中の動静として注目される。この時の四人は、その後どうなったか。秋月についてはこの後詳しく述べることにして、岡は、仙台藩内で孤立して戊辰戦争当時は謹慎を命じられているが、戦後活躍、玉虫は戊辰戦争の際仙台藩の意見を奥州列藩同盟参加でまとめた中心人物の一人として切腹を命じられている。

二 梯次郎に上洛せよという命令が下された時の京都の情勢はどのようなものだったか。

文久三年（一八六三）の政変以後、朝敵として中央から排除されていた長州藩は、元治元年汚名挽回のため武装して上洛、六月二十四日、久坂玄瑞が歎願書を朝廷に提出するが、孝明天皇に却下された。七月十九日、京都蛤御門（京都市上京区）付近で長州藩兵と会津・桑名藩兵の戦闘が勃発、長州軍は一時京都御所内に侵入するが、撃退された。後世禁門の変（蛤御門の戦い）といわれるこの事件により、長州藩掃討に力のあった徳川慶喜、松平容保、松平定敬等はその後京都の政局に大きな力を発揮することになる。

七月二十三日、朝廷は幕府に対して長州追討を命じた。尾張藩・越前藩および西国諸藩から征長軍を編成、動員された藩の数は最終的に三十五藩、総勢十五万人にのぼった。征長総督には、尾張藩老公（前々藩主）徳川慶勝が任命され、將軍から全権委任をうける。征討軍には、西郷隆盛が参謀として参画しており、種々画策して長州藩に対して禁

門の変に関わったとされる三家老の切腹、四参謀の斬首という形で事態の解決をはかった。徳川慶勝は十二月二十七日、独断で征長軍を解兵する。そのため慶勝は、朝廷からも幕府からも批判されることになったが、彼は所労と称して大坂にこもり江戸にも京都にも出向かなかった。

慶応元年（一八六五）五月、将軍家茂は江戸を出発、閏五月二十二日、参内し改めて長州藩征討を奏上、九月二十一日、再征の勅許をうける。

十一月七日、幕府は、彦根藩など三十一藩に、長州藩征討への動員を命じた。このように朝廷と幕府の政策が表面的には着々と実施されているように見えるのだが、同じ年の六月二十四日に西郷隆盛は、京都で坂本龍馬と会見し萩藩の武器購入の代理要請を受託しているし、七月二十一日には、長州藩士井上馨、伊藤博文が、海援隊と薩摩藩の斡旋により、長崎グラバー商会から鉄砲を購入している。薩摩藩と長州藩、土佐藩は、おたがいに反発する部分を持ちながら、実際には既に協調関係が出来上がりつつあったということになる。さらには攘夷をうたって幕府を攻撃しながら、八月二十六日には、薩摩藩から派遣された家老新納刑部、藩士五代友厚が、ブリュッセルでフランス人モンブランと貿易商社創立の契約に調印している。天皇の意向との調整に四苦八苦している幕府をよそに見ながら、既に薩摩藩は、天皇の意向にとらわれず外国と一歩進んだ交渉を始めていたのである。

年が明けて慶応二年一月二十二日、幕府は長州藩の封地十方石減封、藩主毛利親愷蟄居隠居、世子定広永蟄居などの長州処分案を決定して勅許を受けた。実はこうした表向き動きの背景で、一月二十一日、長州藩士桂小五郎（木戸孝允）と薩摩藩士西郷隆盛は、坂本龍馬の斡旋により京都の薩摩藩邸で薩長合従の盟約を結んでいた。その結果四月十四日、薩摩藩士大久保利通は、大坂城で老中板倉勝静に書を呈し、

長州征討の非を論じ同藩の出兵を拒否するという事件が起きている。

### 三

六月七日、幕府軍艦が長州藩領周防大島を砲撃して、第二次長州征討が開始された。七月十八日、広島藩主浅野茂長、岡山藩主池田茂政、鍋島藩主蜂須賀斉裕は、連署して征長の非と解兵を幕府・朝廷に建言する。将軍家茂が大坂城で急死したのはその二日後の七月二十日のことである。

将軍の死を隠したまま慶喜は大討込と称して自ら出陣の準備を進めていたが、十一日、長州攻撃中の幕府側拠点小倉城が八月一日陥落したという報告が届いた。彼は即座に出陣中止を決断した。容保、定敬らは断固反対するが、慶喜の決意は変わらなず、八月十六日、徳川慶喜は参内して征長停止を請う。八月二十日、長州征伐休戦の勅命が下されると翌二十一日幕府は家茂の喪を発し、慶喜の宗家相続を公表した。前線では九月二日、慶喜の意を受けた勝海舟と長州の広沢真臣・井上馨が宮島で会談して休戦協定を締結、この結果大島口、芸州口、石州口で戦闘は終息した。

この間、朝廷と幕府の間に立って、ひたすら京都を守ろうとしていた会津藩では、一方的な慶喜の通告に困惑し、国元へ現状分析の報告を出しているが、幕府関係以外の情報不足で動きが取れない状態が続いていたに違いない。在京諸藩の有志たちと親しく交わり情報交換の出来る人材は、会津藩には残念ながらいなかった。秋月を蝦夷地から呼び戻された背景には、このような京都の情勢があったのである。

### 四

この後にも大事件が続く。十二月五日、徳川慶喜が、征夷大將軍・内大臣に任じられ、幕府の新体制が整うかと思われた矢先の十二月二十五日、孝明天皇が突然亡くなった。慶応三年一月九日、睦仁親王（後の明治天皇）が踐祚、この時天皇は十六歳（満十四歳）だった。関白

の二条斎敬が摂政となつて新天皇を補佐することになった。一月十五日に朝廷は、文久・元治年間に処分された公卿を赦免するという命令を出す。同じ日徳川慶喜は、松平容保、松平定敬を呼んで、長州再征軍の解兵を奏聞するために使者となるよう命じるが、容保は板倉勝静に征長は先帝の遺志であるとしてその不可を申し入れ、公用局において意見調整を図る。板倉は容保に引き受けるよう連絡するが容保は固辞して受けず、一月十七日病と称して出仕もしなかった。幕府はやむなく板倉勝静と松平定敬を使者として参内させた。幕府は一月二十三日長州再征軍解兵の命を発し、長州藩との敵対関係をとりあえず解消した。この件について会津藩は全く納得せず、以後容保は、ほとんど国事に関わろうとしなかった。〔七年史〕混乱する情勢の中で二月十二日に容保は、守護職辞表を提出するが許可されなかった。幕府は在京の会津藩家老、田中玄清、梶原兵馬を必死に説得した。これに対して会津藩側では、藩内の窮状を訴えるため国家老内藤介右衛門信節を上洛させた。内藤は、京都在勤中の元治元年四月、二十六歳で若年寄に任じられるが程なく免職、国元に帰り慶応二年九月復職、同じ日に家老職に任じられていた。こうした混乱のまっただ中に秋月胤永は京都に戻ってきたのである。

## 五

悌次郎が京都に到着したのは慶応三年三月下旬である。「丸山氏系図」中秋月悌次郎の項には、

三月二十五日、京都において持席にて公用人方勤め帰役仰せ付けられ、格別に御役料二分只今までの通り下され候事。

とあって、この間の事情が分かる。公用方から公用人へと役職がランク上がったのはいるが、手当の少なさが諸生身分での出仕という藩内での彼の位置を物語っている。この上洛には、故郷会津若松から、養嗣子胤浩を同道していた。自分の身近で用を足してくれる人物が必要

と思つたからであろう。（この時胤浩に与えたのは、彼が「飽抗刀」と名付けた会津の刀匠林重房の作で、新選組の近藤勇が見て是非譲つてほしいといった程の銘品だった。胤浩はこの刀を持って戊辰戦争中敵と戦った。『刀史』）

四月八日、容保は、請暇帰国の願書を幕府に提出した。幕府から内々で許可されたという通知を受けて彼は、このことを、尾張の徳川慶勝に通報している。以前から慶勝は容保が守護職を早く辞任するように思っていたのでこれを喜び、

長々御勤勞之処、近々御暇之様子、御養生の爲め一段之事に候、定て熱田宿御止宿候半、其節名古屋へ御滞留にて寛々京都之様子承り度、且つ高須より肥後守の生母呼寄候様可致、必ず御出候様致度候。

と容保に手紙を贈っている。〔七年史〕熱田の宿で泊まることにならうが、そのついでに名古屋にまわるとよい。京都の話も聞きたいし、高須にいる容保の実母を呼んでおくから、必ず立ち寄りといっているところには、肉親の情愛がにじみ出ているといふべきだろうか。だが情勢の逼迫などでこれは実現しなかった。

この時会津藩の公用局が悌次郎に求めたことは、文久の政変の原動力となった彼の人脉によって在京雄藩の動向を把握することにあつた。文久の政変は、よく知られているように薩摩藩士の高崎佐太郎が、京都鴨川畔の三本木にあつた会津藩士の宿舎に悌次郎を訪ねてきたことによつて動き出した。その後、排除された長州藩士から、首謀者は悌次郎だとして暗殺者に狙われたという事情などから、変事を懼れた藩庁は彼を国元に戻していた。この時の暗殺を計画した壮士の中には、後に日本大学を創始した山田顕義などがいる。この時彼を付け狙つていた壮士達は、悌次郎の顔をはつきり知らなかったので取り逃したと、維新後悌次郎に語つたという。蛤御門の変が勃発した時には、成り行

きを心配するあまり、独断で上洛して事件の本質について藩庁の当事者に説明しようとしたが、藩庁は滞在を許さず病氣というなら駕籠を雇ってでも帰れとすげなく追い返してしまう。藩外での悌次郎の評価の意味を、会津藩の公用局は十分認識していなかったことが分かる。元治元年の冬、会津藩士は戦勝による恩賞の沙汰でわいていたが、在京諸藩は既に次の事態に備えて動き始めていた。その後の二年間は悌次郎にとっても会津藩にとっても痛恨の空白となった。

## 六

公用局に復帰した彼は、ひとわたり旧知の人たちへ挨拶回りをした。文久の政変で会津側に立って大きな役割を果たした中川宮には、四月五日に出向いている。

会津秋月悌次郎去月上京。又々公用人被申付候由ニテ参ル。令対面、蝦夷地産物献上候事。(『朝彦親王日記』)

四月十八日に悌次郎は、京都の越前藩邸、宇和島藩邸を訪問、松平春嶽、伊達宗城に面会している。悌次郎が春嶽に伝えたのは、イギリス公使パークスが四月十三日に敦賀旅行の許可を幕府に求めて許可された件で、朝廷も十五日許可したが、担当した広橋胤保、六条有容、久世通熙、野宮定功らが十七日に辞任したことについて、これはその措置に不服な土佐藩を脱藩した過激派浪人が、ピストルを持って関係公卿を脅迫したからだという事件の背景の説明である。(『続再夢紀事』)

一方同じ日悌次郎に会った伊達宗城はこの日のことを、  
会津秋月悌次郎昨日参、薩之悪口致シ決而彼藩杯へ組合不可申ト  
議論致候故、程能申置候趣。尤近来絶而会人不來、悌次郎ハ從來  
懇意、來候事ニ考候由。

と、日記に書き残している。(『伊達宗城在京日記』)

注目されるのは、宗城が、悌次郎が薩摩藩の悪口を言ったと書いて

いることで、悌次郎が薩摩藩の悪口を言うとなれば、それは彼が帰洛後何らかの関わりを薩摩藩と持った後のことであるから、悌次郎の薩摩藩邸訪問は、十八日以前のことということになるのだろうか。それはともかく、宗城は、最近は会津藩の人間は全く来たことがない、悌次郎は以前から懇意にしていたから来たのだろうかといっていること、会津藩の情報網の偏りを知ることが出来る。

## 七

会津藩が悌次郎に期待した最大の案件が、薩摩藩との旧交を回復することにあった。財政的な急迫の中でなんとか打開策を見いだしたい会津藩としては、禁門の変後急速に関係が悪化している薩摩藩との関係回復が急務だったからである。孝明天皇の存命中は、天皇と幕府の間にあつて一橋慶喜、松平定敬等と一会桑と呼ばれる連係プレーが出来ていたが、その間にも西南雄藩は独自に交流を続けていた。胤永の京都復帰以前の事態を概観した中で知られるように、薩摩藩と長州藩は、その時々密かに連係を試みている。胤永が出掛けていった薩摩藩は、第二次征長に関しては、正面切って反対の意思表示をしている。孝明天皇亡き後、西南雄藩との関係をどうしたらよいのか、会津藩には全く情報ルートがなかったということが分かる。

明治二十六年、第五高等学校教授だった彼は古希を迎える。その際、生徒達が作った『鎮西余響』という文集に、笠間益三の手になる彼の略伝が掲載されている。そこに、彼が京都に戻った頃の事件が記されている。それによると、彼は家老の内藤介右衛門信節の依頼を受けて薩摩藩邸を訪れたという。国元から出てきたばかりの若い家老が、胤永に外交関係の指示を出す。会津藩の無策ぶりが分かる事例である。

薩藩老小松帯刀、先生と旧有り、また適京師に在り。先生將に就きて謀る所有らんとす。往きてその館を訪ふ。帯刀相逢ふ遽あらず。少しして、海江田武治出でて曰く、君何用有るやと。先生従容

として曰く、余久しく蝦夷に在りて、近時貴藩との交際如何なるやを知らず。聞くが如くんば前日に大異す。余が今日の来意は、首は久光公来朝を賀し、かつ小松君と面し二藩前日の交を復さんと謀るに在りと。武治少しく氷積する所有り、即ち入りて、帯刀と先生相見えしむ。先生帯刀に語るに、肝胆を以てすといへども、帯刀ただ唯々を以て答ふのみ、終に旧に復する能はざるなり。(原漢文)

文中の先生とは、胤永のこと、生徒の手になる文章だから敬称が使われている。島津久光の上洛は四月十二日だから、それ以降のことである。胤永は京都に来ていた薩摩藩家老小松帯刀と現下の情勢について話し合いたいと、薩摩藩邸を訪ねた。帯刀は忙しくて会う暇がないとして、藩士の海江田武治が胤永にどういう用件かと尋ねた。自分しながらく蝦夷に行っていたため、最近の会津藩と薩摩藩との関係がどうなっているか分からない。聞くところでは以前とは一変しているという。今日の訪問の主たる目的は、久光公の上洛を賀し、さらに小松氏と面会して会津二藩の関係を以前のよう親密にしたいためである。そう答えると、海江田は納得したようで小松に取り次いだ。帯刀と面会して胤永は肝胆を砕いて真情を吐露したが、帯刀は、ただウンウンとうなずくのみだった。

この時期の会津藩士の訪問に帯刀が聞き流す以外方法がなかったことは歴然としている。この件については、後年牧野謙次郎が胤永から聞いた話として『維新伝疑史話』第四 識見「四十一 会津の秋月自から其の迂闊を晒ふ」にも残されている。

会津の秋月胤永(悌二郎)嘗て予輩に語りて曰はく、今よりして之を思へば、迂なるかな予が輩や。宜なり、薩長の為に一敗して起つこと能はざりしことは。昔我が寡君(容保)守護職を以て京都に在り。元治蛤門の戦後、説を伝ふる者あり、曰はく、薩長の

密約成れりと。時に我が藩固く薩を信じ互に深く結托する所あり。然れども其の説稍々盛なれば、予乃ち知れる所の小松帯刀(薩摩用事の家老)を訪ひ探問せんと欲し、薩邸に至り来訪を通ず。一士人あり出で迎へて曰はく、小松は、朝来緊急の事生じ、今方に別室にあり。請ふ少く待たれよと。予乃ち他日を約し帰意を告ぐ。又良々久しくして海江田武次来りて曰はく、小松は藩事の辞すべからざる者あり。今日は遺憾ながら失礼す。急用ならば、某請ふ代り聴き以て小松に伝へんと。予心に謂らく、機事固より彼の輩と与に語るべきにあらずと。乃ち辞して帰る。是の日朝五ツ時(今の午前八時)より夕方七ツ時(今の午後四時)に至るまで、空しく薩邸に小松を待てり。後日之を聞くに、薩長の密約は實に是の日を以て京都に於て成れり。小松氏より覩れば必ず云はん、会津の愚、何ぞ其れ迂なるやと。

こちらの話では、胤永は小松と会えなかったことになっており、午前八時から午後四時迄空しく薩摩藩邸で小松を待ち続けたが、実はその日こそ京都において薩長同盟が成立した日だったとあり、小松から見たら「会津は何と世間知らずの愚か者か」というに違いないと一層劇的な展開になっている。この話については牧野が「会津の秋月自からその迂闊を晒ふ」という題名にしているとおり、いかに自分たちが迂闊だったかを思い知らされたという話として残されている。徳田武は、『秋月韋軒伝』においてこの事件を「韋軒が京都に在る時に成った薩長の密約という」と、慶応元年六月二十四日、西郷隆盛が京都の薩摩藩邸で坂本龍馬らと会見して長州藩の武器購入を助力する事を約した件くらいしか考えられない」として慶応元年六月頃のこととしているが、この時期秋月は会津にいた。これは全くの誤解である。秋月の表現には、ままた文飾が見られることはこれまでも指摘してきたとおりで、薩長の密約当日というよりそういう事態が進行していた頃とい

う理解でよい。そういう点で、悌次郎が薩摩藩邸に赴いたのは、久光が上洛した四月十二日以後、宗城に薩摩藩の悪口を言ったという四月十七日以前ということも考えられるのではなからうか。

## 八

この頃から、事件を追って事態の変化をみてゆくと、倒幕への気運が急速に盛り上がっていつていることが分かる。

四月、土佐藩、坂本龍馬の亀山社中を同藩海援隊とし、龍馬を隊長に任命。

五月二十一日、土佐藩士板垣退助、中岡慎太郎ら、薩摩藩士小松帯刀、西郷隆盛らと京都で倒幕計画を密約。

五月二十三日、慶喜、参内して長州藩処分、兵庫開港の勅許を奏請。（二十四日、兵庫開港のみ許可。）

六月二十二日、土佐藩士後藤象二郎、坂本龍馬ら、薩摩藩士大久保利通、西郷隆盛、小松帯刀らと会談し、大政奉還などを内容とした薩

土盟約を締結。

七月二十九日、中岡慎太郎、京都土佐藩邸を本陣として陸援隊を組織。

七月、大久保利通ら、幽居中の岩倉具視と共に王政復古を計画。

九月十三日、中川宮は「防長のもが大坂に来た時は……」と悌次郎に質問した。悌次郎は中川宮家にはこれまで度々出向いており、宮家の家政上の相談を受けるなどしているほか、公用局からの依頼案件などを報告したり、あるいは宮から他の公卿に対する連絡を頼まれたりしている。特に摂政二条斉敬の元へはひんばんに出入りしている。注目されるのは、中川宮と斉敬との連絡係をしている案件があることや、中川宮が以前幕臣原市之進がつとめていた役割を近藤勇にさせたかどうかと秋月に相談していることで、中川宮の信頼があつく、宮は彼を中川宮家の家令として会津藩から借り受けたいとまでいつている。この問いは、薩長の情報が全く中川宮や幕府関係者に届いていな

いことをうかがわせる。九月十八日に、薩摩藩と長州藩とは拳兵倒幕を約している。（二十日、広島藩も参加。）

## 九

九月二十日、幕府若年寄格永井尚志は、後藤象二郎を招き、土佐藩が計画している大政奉還の建白を早く出すよう伝え、近藤勇を紹介した。近藤は、長州藩が反省、悔悟がなくては幕府の中で議論が収まらない。と後藤にいつたのに対して、後藤は幕府が国難を気にせず征討等という事態を引き起こしたのは間違いだといったので近藤は黙ってしまったという。（『寺村左膳手記』幕府の側から大政奉還の建白書を早く出せといつているのだから、慶喜にはもちろん、大政奉還が、自分と国の運命についてのどのような意味をもつものか分かつていた。ところが会津藩は、近藤の発言でわかるようにあいかわらず長州藩の姿勢にこだわっている。大局的に問題を捉えることが出来ていなかったのだ。両者の現状認識の隔たりはあまりにも大きい。ここに幕府の不幸があった。慶喜は問題の把握に優れた大局的な判断が下せると同時に、その際どのように動いたらよいか考えることの出来る人物である。彼がリーダーとして自分の主張を実現するためには、彼の意図を汲んで手足となつて働く部下が必要だった。先代將軍家茂の下で慶喜が補佐役を果たしていたら事態はあるいは変わっていたかもしれない。家茂が亡くなり、これまで補佐役だった慶喜が前面に出て、事態の解決を図らなければならなくなった時、慶喜の考えを汲んで動くには、容保、定敬はこれまでのいきさつに縛られすぎて身動きが取れなくなっていたのだ。

九月二十一日、慶喜は内大臣に任命される。だがその翌日、土佐藩は大政奉還の建白書の提出を決め、老中板倉勝静に面会を求めた。板倉は二十四日に会うと答えるがこれは延期になる。土佐藩は十月二日、薩摩藩の小松帯刀から提出賛成という答を受けて、三日、後藤象二郎

が、板倉勝靜に前土佐藩主山内豊信の大政奉還の建白書を提出した。同日日薩摩藩は、藩士益満休之助を江戸へ派遣した。これは西郷隆盛の差し金で、益満の顔の広さを頼りに江戸で浪士等を語らつて、幕府に戦争を仕掛ける名目になるような事件を起こしてこいといわれたという。桐野利秋はこれを『京在日記』の中で、「彼表ニ義拳賦り」といつている。

一日、西郷が木屋に益満を呼んで、お前江戸に行つて呉れ。予てお前は同志の仲間も広いから、江戸に出て浪士等と雑せ返して来い。さうすれば必ず兵を向けるであらう。其時は出たり隠れたりして充分に雑せ返して呉れ。其揚句には抵抗して来いと云ふことを申し聞けたさうです。そこで益満は得意の事であるから喜んで受けあひ、伊牟田等を列れて江戸に出、浪士を集むることとなりました。長州よりも二、三人来られたと云ふことである。

（落合直亮『史談会速記録』十二輯）

益満は得意のことだからと喜んで出て行ったという。（これが、二月の薩摩藩邸焼き討ちにつながる。幕府関係者を排除、敵に仕立てるといふ西郷の謀略がみごとに成功したのである。）

## 十

事態は一気に動き出す。十月四日には、寺村左膳、神山左多衛が、二条斎敬邸に建白書の写しを届ける。一方後藤象二郎ら土佐藩士五名が、同日夜会津藩士小野権之丞、外島機兵衛、諏訪常吉、上田伝次、四人を近喜樓へ招いて、大政奉還建白について説明した。

今般如何之意底を以建白ニ及候段演舌ス。会藩意外之事ト推察ス。併し別ニ異論もなし。四時各帰宅。

会藩ハ無二ノ幕府論ナルカ故ニ、大政返上ノ事ハ勿論不同意ノ訳也。サレト当時ノ薩藩論ノ如キニ比スレハ、其旨意幕府ヲ保佐スルノ意アルヲ以テ、吾藩之論ヲ弁難スル不能モノ、如シ。（『寺村

## 左膳道成日記

会津藩は、無二の幕府中心だから、大政返上は不同意のはずだが、薩摩藩の倒幕論に比べたらこちらの意見は幕府を補佐する趣旨なので、むげに非難はしなかつたようだ。これが土佐藩の受け止め方だった。翌十月五日 近藤勇が、後藤象二郎に建白書の写しを見せてほしいと手紙を出している。会津藩内でもようやく動きが出てきたのである。近藤勇が直接後藤象二郎と話が出来たといっていることは注目されてよい。彼は中川宮が原の代わりに推薦したいといっていることでも分かるように、いわゆる新選組の無骨で粗野なイメージの武者とは異なる視野の広い着実な性格の人物だったといえる。

これとは別に大政奉還の建白に対する会津藩の様子を、中根雪江が記録している。

会藩は其砌及一論候処、外島機兵衛、手代木直右衛門之兩人は尤と存候得共、猶衆議之上可及返答との事に而、三日之後、議論兩端に分れ候間、今暫待呉候様との事に而、第八日之後、君前に而定論、御同意之段及御挨拶候様、会侯被命候由に而返答有之、表向同心候得共、油断は出来不申候由。（『丁卯日記』）

会津藩ではこの建白について議論したところ、外島機兵衛、手代木直右衛門の二人は納得していたが一応相談の上返答するということがあったが、三日後に意見が二極対立しているのもうしばらく待つて欲しいということだった。八日目に藩公の前で藩論を同意にまとめ、そのように返答せよと藩公に命じられたということと返事があった。ただこれについては表向きは同意ということだが、油断は出来ないといいことのようにだ。

容保が守護職を拝命して、公用局が設置された時に決めた、メンバー全員が討議して策を決めるという方式が採られていることを、この伝聞は分かせてくれる。この当代会津藩の表だった対応をしていた手



代木と外島には、ここにいたる事情がよく分かっていたので。悌次郎は、この時どうしていたのか、ここに彼の名は出てこない。

十月六日、広島藩主浅野茂長が、同じ建白書を幕府に提出するが、同じ日に、薩摩藩士大久保利通、長州藩士品川弥二郎は、反幕派の公卿岩倉具視、中御門経之と、王政復古策を協議している。

十月十三日、大政奉還の建白書を受けた幕府では、徳川慶喜が在京十万石以上の諸藩の重臣を二条城に集めて、大政奉還について諮問している。その一方で慶喜は新しい政治体制をどうしたらよいか、西周に西洋議会制度についての説明を受けていた。もともと慶喜は、幕府が日米和親条約を調印した時には天皇の裁可を受けていないとして、手続き問題を理由に不時の登城をした過去の事件を見ても分かったとおり、水戸家の尊皇思想を受け継いでいるから、条件が整えば政權返上を断るいわれはない。その翌日、慶喜は、朝廷に大政奉還上表を提出した。意見を調整した上で事態の解決を図るといふ幕府側のこうした動きに対して、反幕府側の急進派はどう対応したのか。

日本の歴史には、現役の政權担当者の政敵に、内々で天皇ないしは上皇など皇室関係者が密勅を下すという例が幾度かある。この時は、岩倉具視が十月十三日、薩摩藩主に討幕の密勅を下し、幕府を通さず長州藩主父子に官位復旧の旨を渡す。さらに十月十四日、三条実愛は、長州藩主父子に討幕の密勅を渡している。（これは当時から偽勅だといわれており、朝廷の合議というものが形式化して一部の方策士の思うままになっていたということを示しているといえるだろう。）

十一

十月十五日、大政奉還の勅許がなされた。事態の急変を受けて、容保は、翌日内田武八に親書を持たせて国元に派遣した。親書の中で容保は、京都の情勢を記した上で、万々に備えて諸政策を刷新し兵制を整えるように求めた。これをみた国元の家老座では即日意見をまと

め、家老田中土佐、神保内蔵助、萱野権兵衛が若松を出発して京に向かった。親書には、

能と武八遣候。爰元不容易形勢は委曲家老共より申遣、承知致候筈に候。此上は拙者所存は、家老始一和一力に相成、有らん限之力を尽し、累代之御恩を奉報候外他事無之候。右は固より覚悟之事に候得共、此上は猶又如何成不慮之儀生候も難計、就而も軍政筋始改革を最第一之急務と致候処、右は明春爰元へ打寄、決議候筈に候得共、前段之都合に付而は、乍大義至急に登京致具、直に論決之上、万事今日より手卸し致候様致度候、然し若狭（筆者注喜徳）も在国之事に有之、殊に留主之儀は古より大任と致候事に候得は、是又申合之上、一人は居残、国内之儀聊案筋無之様、破格に吟味を疑し、二百里外相隔候とも爰元合体、余か苦心を察し、憤発興起致具候様頼入候也。（『会津藩文書』）

とあって、喜徳が国元にいるから、彼を中心に一致団結してこちらと共同歩調が取れるような体制を作れといつてゐる。

十月二十五日、慶喜は將軍職辞任を奏請するが許可されなかった。

徳川慶喜が大政を奉還したことにより江戸幕府の支配は終わりを告げた。だが新しい政治体制が決まらないまま慶喜の將軍職辞任は許さず、京都守護職も残された。朝廷と大名諸侯との関係もあいまいで、新体制へ向けての駆け引きが激しかった。慶喜が、徳川家も諸侯の一つとなって新政府に参加するというプランを持っていたことは確かである。この日、薩摩藩の吉井幸輔は、先に江戸の派遣した益満休之助、伊牟田正平に対して、事情が変わったので、浪士達に勝手な行動をさせないようにという手紙を出している。だが彼らはそんな連絡には見向きもしなかった。一方松平容保、松平定敬等会津、桑名の両藩にとっては、そこに至る以前に、孝明天皇の許で執行してきた正義が、新政府でも認められるということが次への出発点だった。具体的には長州

藩の処遇に代表される一連の事件である。皇居を武力攻撃した長州藩が、新政府にそのまま諸侯として登場することは法治主義の精神からしてあり得ないというのが会津藩の認識である。会津藩では必死で同志を増やそうと各藩に働きかけた。十一月二十六日には、在京の会津藩士が、水戸・岡山・鳥原・盛岡・浜田・仙台藩士と会し、時事を協議したという記録が残っている。仙台藩の『慶応丁卯筆記』によると、出席した会津藩関係者は、小野権之丞、手代木直右衛門、上田伝次、秋月梯次郎、倉沢右兵衛の五名、この時の会合は単なる親睦のみだったというが、情報交換に重用な意味があったことは確かである。

## 十二

そんな中で、十一月二十九日に長州藩の武装勢力が大阪湾岸尼崎の打出浜に上陸し、上洛の意志を宣言した。大政を奉還した以上問題は朝廷の裁量にあるとしていた慶喜に対して、容保、定敬は激しく反発した。会津藩士が二条家などの屋敷に出掛けて長州藩の処置について陳情していることについて、十二月五日、松平春嶽が慶喜に大坂城で面会、会津藩が口出しすることではないといったことを受けて、慶喜は会津、紀州などの藩に対して以後は朝廷の指図に従うように命じ、会津藩へは平山図書が手代木にその旨通達して説得した。

十二月五日、二条斉敬の命を受けて戸田大和守忠志（幕府若年寄）が急遽大坂城に来て慶喜と対面し、長州藩の処分について、容保、定敬を交えて議論した。容保、定敬等は強硬論で激しく反論したが、最終的に慶喜から天皇の裁断に従うという返答を取り付けた。

十二月八日、摂政二条斉敬は、国事係宮、公卿、大將軍（慶喜）以下在京の諸侯を集めて会議を開いた。慶喜、容保、定敬は病氣と称して出席しなかったが、その席上で三条実美以下、文久の政変時に官位を剥奪された公卿の官位を元に戻し、長州藩主毛利大膳父子の罪を許し官位を復して入京を許すことが決定された。この結果に反対する勢

力の鎮撫は慶喜に命じられるという皮肉な決定であった。さまざまな駆け引きの最後に反幕府派が京都の支配権を確立した十二月九日、王政復古の大号令が下った。この日開かれた小御所会議では、慶喜の処遇を巡って議論が紛糾したが、孝明天皇時代から幕府側と協調体制を取ってきた親幕派公卿、穩健派の藩公を抑えた過激派が議論をリードして、慶喜に辞官納地を命じる決定を下した。京都御所の警固は薩摩藩兵らに命じられ、会津藩、桑名藩は警備から外された。旧幕府側に対する包圍網が嚴重になる中で、薩摩藩が二条城の幕府軍を攻撃するという噂が広がった。十二月十一日、手代木直右衛門は二条城で越前藩士の中根雪江、酒井十之丞に向かつて、

薩兵既に城へ迫るの報知あり、先きんする時は人を制す、今討たすんは戦機を失して敗を取らんとす、如何思ふ

と血眼になって詰問した。雪江らは虚報で事実ではないと説得したのでその時はおさまったが、暫くすると走り寄ってきて

薩兵今已に竹屋町通より押来ると、斥候之者より申出たり、如何あらん

と騒ぎ立てる。今そんなことをすれば彼らが朝敵にされる。そんなこととはあり得ないと雪江は言い含めたが、とにかく城中ではこんな騒ぎになっていた。（『丁卯日記』翌十二月十二日、混乱を避けるため慶喜は、容保、定敬を引き連れ二条城を出て大坂城に入った。十五日付で松平容保、松平定敬は、京都守護職、京都所司代をそれぞれ辞任、会津藩は文字通り京都における公務を終えた。）

## 十三

十二月十四日になって、王政復古の報が江戸の会津藩邸に届いた。この報告を一番はじめに聞かされたのはこの時留学生として江戸に来ていた書生の永岡敬次郎である。彼は即座に藩の江戸留学生に呼びかけて、事態にどのように対応するか、芝新橋銭座にあった藩邸の学校

で会合を持った。この時集まった書生は四十数人、口々に「今こそ戦う時だ。勉強などしている時ではない。」と唱え衆議一決、永岡敬次郎、浮洲七郎等が藩の責任者上田学太輔に西上の許可を求めた。上田は中々うんと言わなかったが、永岡が、学校奉行の町田伝八に向かつて、許可がなければ脱藩してでも藩の危急を救うといったので上田もやむなく許可した。その際町田の率いる江戸常誥大砲隊を同行させた。書生隊は即日、大砲隊は翌日出発し伊賀経由で大阪に向かった。（『七年史』）

京都、江戸、会津、それぞれ時間差があるなかで、一つの事件を巡ってさまざまに動きが展開してゆく事情がよく分かる。

#### 十四

十二月二十五日のことである。従来、京都守護職として治安維持の最先端にあつた会津藩では、京阪地域の混乱ぶりを目の当たりにして、大坂に退去していた手代木直右衛門・外島機兵衛が、後藤象二郎にあつて徳川慶喜の復権を懇願する手紙を送っている。

当九日の挙動を見聞致候に兵杖騷擾、九門内人を干禦する如く、何等の所為は不存候へども、正明公平之御改革にて、従容として天下之公議を尽し、幼冲之帝聞不驚にも、猶為すべき事には候らはずや。承候は一、二議事之臣、名を正明公平に託し、其実野心を挾候者有之候哉之由に候。左も無之ては独自ら擾々の事を不用筈に候。正明公平之思召にして、其実跡を明示せられ候とも、家喻人説する事能はざる勢に候へば、遂に無事之生靈血を流すもの有之候半と被案候儀に候。ましてや此間の挙動の如くにては、此末如何哉苦心無限事に候。

且徳川氏衰弱と雖も、譜代恩眷之徒猶多、水陸之練兵稍備、一、二之奸臣を甘心し、而後正明公平の政道相立候様、日夜に差迫りて建議し、衆論合さるもの無之哉に相聞へ候へとも、猶発起せさ

る者は、内府公断然許容せられず、懇解弁慰、日々浮雲一去天日開恨世、庶幾せられ候而已之由に御座候。只試に平心澄気瞑目して今日の自体を御覽被成候はゞ、果して正明公平にして、一点之私心ある者無之哉否、内府公の至誠如此、九日之暴挙如此にして、天下の侯伯尽心するや否、心服せずして政令一途に普行致し候哉否、兄之至誠固より前日に異ならざるを知り、又御尽力に因りて大に綱紀を維持せるを聞、此上所願は速に一、二野心ある者を除、而後内府公を推し、天下と共に天下の議を定められ候様、所祈に候へとも、前日之高論を思ひ鄙思不能止、愚見を申上候迄に御座候。敢て他人に向て弁説致候儀には無之候間、此段共御承知被下、為国家御瞭察所願に候。頓首。

十二月廿五日 外島機兵衛

手代木直右衛門

後藤象二郎殿（『後藤象二郎』）

だがこうした危惧は新政府にとっては全く無意味で、問題にもされなかつた。

#### 十五

同じ二十五日の夜、江戸では、江戸城下の警備と治安維持にあつていた荘内藩士らが、江戸を荒らし回っていた暴徒が薩摩藩邸に逃げ込んだのを確認して薩摩藩邸を焼き討ちした。薩摩藩の芝屋敷に集合した浪士等が夜になると富商の屋敷に押し入って略奪強盗を働き、乱暴狼藉の限りを尽くしたので、江戸では昼間も店を鎖してしまふようになった。たまたま幕府から江戸市中の警備を任されていた荘内藩士らが情報をキャッチして賊徒を捕らえるために藩邸に火をかけたのである。

『京都守護職始末』によれば、江戸市中ばかりか、常陸、上総、下総、上野、下野の関東一円を盗賊が荒らし回っているため、恐ろしくて仕

事が手に着かず、夜歩きなど全く出来ない状態の中、江戸城西の丸が失火で焼け落ち、あげくに市中警備の庄内藩の兵營を襲撃発砲した。応戦した庄内藩兵に撃退されて逃げ込んだ先が薩摩、佐土原藩邸だったというのである。藩邸にいた益満休之助等は捕らえられたが、その他は船で逃走したとある。時に少し異同があるがこれが薩摩藩邸襲撃の真相であることは、土佐藩士寺村左膳が次のように証言していることでも分かる。

江戸表二而も諸浪士数々、薩摩の芝屋敷へ集り隊を結び、夜二乗し而富商を掠奪し、乱暴甚し。仍而江戸白中(昼)戸を鎖スニ至る。庄内藩兼而江戸警衛之職ト有、依而兵を備へる芝の薩摩邸を囲んでこれを焼討ス。賊徒敗走ス。『寺村左膳道成日記』

寺村左膳は、土佐藩士で薩土同盟の成立の深く関わった山内容堂の側近である。彼は、問題が薩摩藩側にあつたことをよく知っていたのである。

実はこの日より二日前の二十三日、江戸城二の丸で火災が発生した。『続徳川実紀』によれば、朝五時頃に二の丸のお広敷長局から出火して、燃え広がったため、天璋院(島津家出身十三代將軍家定正室)、本寿院(家定の母)、実成院(十四代將軍家茂の母)は、一旦三の丸に立ち退き、吹上の庭を経て現在は西の丸にいますという報告が入った。

今晝七ツ半過、二丸御広敷長局より出火、追々焼募候二付、天璋院様、本寿院様、実成院様、一旦三丸へ御立退、夫より吹上御庭滝見御茶屋へ御立退被遊、唯今西丸へ被為入候段、御広敷御用人并御附御用人より申越。

『京都守護職始末』には言及がないが、実はこの事件も、後年関係者が語ったところでは、先に西郷隆盛の命を受け、江戸へ下っていた益満休之助、伊牟田尚平らによる放火が原因だという。『史談会速記録』(十五輯)の次のような談話がそれを裏付けている。

落合(直亮)君(中略) いずれ伊牟田、益満の兩人の内から手が廻つたものであると云う事を聞いて居ります。

寺師(宗徳)君 伊牟田などの話でありますか、玄関に這入って団炭(たどん)を草に包みて行つて、挿し入れて付けたとか申しますが。

—中略—

寺師君 其時、伊牟田などが団炭を風呂敷に包みて塀を越えて這入つて、本丸の玄関の畳をこわして、その下に団炭を入れて点けたと云うことに聞きますが。

市来(四郎)君 まっち(マッチ)の流行りかけで、長崎から畳をこすりて火の出る物を持って来て居ると云うことであつたとやら申します。

岡谷君 どこから這入つたものでござりましょうか。

市来君 名は余程堅固なものであれども、這入つて見れば番人は居ても逃げて仕舞うて、無人の地同様であつたと後に伊牟田が言つたそうです。

江戸城に侵入して放火した犯人伊牟田の行動が具体的によく分かる。倒幕に手段を選ばない過激派武士団の仕業であるが、維新後に平然としてこうした証言が出ていることはしつかり記憶しておくべきだろう。

実は、大政奉還の上奏が出された日、京都にいた薩摩藩の吉井幸輔は、江戸の益満休之助と伊牟田尚平に手紙を送り、彼らが江戸で集めた浪士隊の三田の藩邸を拠点にした過激な行動を慎むよう求めたことが分かつている。ところが、西郷が派遣した益満一派はそれを無視して江戸市中を荒らし回っていたのだ。

## 十六

十二月二十五日、会津若松において容保の養嗣子喜徳は、藩士等を

城中に召集して、今後の藩政について申し渡した。喜徳は、徳川慶喜の実弟で幕命により、慶応二年十二月に水戸徳川家から容保の養子に迎えられ、九月十一日に京都を出発して国入りしていた。

この申渡しは、松平容保が派遣した内田武八がもたらした容保の親書を受けて出された。内田が若松に到着したのがいつかは分からないが、この申渡しの前だとすると、京都を出発したのは、容保が慶喜に率いられて大坂に退去した直後のことではなからうか。家近良樹は『稽徴録』の注で、内田が親書を持って幕府の軍艦に便乗して江戸に着き、その後陸路で若松に向かったと述べている。

今日之形勢に相至候に付ては、国の人民一致一力に相成り、大義を明かにし神明に誓ひ、力を不尺候ては不相成義と御悲泣御決心之上別紙之通一統へ布告候様、若殿様 御沙汰に付、為読聞候、土津様以来御厚恩を奉蒙候者共、報国尽忠之時と決心致候様、一統へ可申渡候事

現在の状況に立ち至ったからには、藩民が一丸となって大義を明らかにし、神明に誓って力を振り絞らなければならなくなつたと涙を吞んで決心したので、一同に別紙のとおり布告するようにとの若殿様の御沙汰があつたので、読み聞かせる。

こう前置きをした上で、誓文が読み上げられた。以下にその要旨を述べる。

嘉永六年、安政元年以来、外国船が渡来して、物価が騰貴して庶民の生活が苦しくなり政府から人心が離れた原因は幕府の失政にある。天皇は心配されて公武の關係にひびが入つた。幕府は反省して旧弊を除き尊王の姿勢をはっきりさせ、諸侯の中から我公を守護職に任命された。

京都の状況はどうだったか。天皇の意向がどこにあるか分からないまま、誰も取立て事態の解決にあたらうとはせず、衆議は

まちまちだった。我公は幕府の内命を受けて京都の内情を探り、天皇の意向がよくわかりになつたので、守護職となつて天皇を守り、信用していただければ公武の關係を円滑にして徳川家の安泰を図る。もし任務の重さに押しつぶされて命を失うことがあつても上洛してそこを墳墓の地と決め天皇を守り万人を救おうと決心して仕事を引き受けられた。

それ以来我公が精忠を尽くされたので天皇は深く依頼され、將軍の寵愛も厚かつた。このため以来六年の間どんな危難があつても有利に運び誠忠の気持ちは変わらなかつた。天皇はよろこびのあまり何度も宸翰を下された。我公が嘗て病に冒された時にはもつたないことに天皇自ら病氣平癒の祈りを捧げられた。大変な厚遇である。この春には、先帝のために尽力し守護職を永くつとめた功績ははかりしれないとして参議にまでして下さつた。長州藩は尊王攘夷といひながら、内心叛逆を謀り、朝廷を誘惑し、幕府を欺く罪は、限らない。

元治元年には大兵を率いて皇居を襲撃し、弾丸は御所の屋根を貫いた。天皇はお怒りになり將軍も激怒されたが、処罰は軽くわずかに官位を取り上げ所領を削つただけで済ませた。命令に従わなかつたためその罪を認めさせるため征伐することになった。所が天皇が亡くなり將軍も没して、大喪が続く中でそのすきに邪臣が幼帝を惑わせ、こじつけをして長州の罪を許して官位を復旧し、先帝が排除された公卿を取り立て、陪臣を政治に参加させ、逆に摂政、將軍、我公、桑名公などはみな免職となり、正邪、忠奸が全く入れ替わつてしまつた。これは先帝の意向ではないばかりか現天皇の意向でも無いことははっきりしている。

先帝の喪が明けないうちに現天皇に父の方針を変更させるなど、無道の至りだ。その外、国内では内乱を企てイギリスなど外

国軍に降伏してその力を借りるなど、その罪は重い。

ここまで来ると、幕府や我公に汚名を負わせ、討伐しようとするかも知れない。我公の忠誠が水泡に帰すのは残念至極である。今こそ臥薪嘗胆、君公のために決起する時だ。人として、臣として一瞬たりとも安穩とはしてられない。

朝廷に対して戦いを挑むことはあつてはならないことだが、邪臣が天皇の命令をゆがめて戦争を仕掛けてくるならば、関東の勢力を糾合して義兵をあげ、君側の奸を排除しないわけにはゆかぬ。我公の誠忠が貫徹しなかったのは、志が貫徹していなかったからか。そうだとしたら、それは私たちが君公の気持ちを十分に受け止めていなかったからだ。畏れ多いことだ。

我藩の士民一同藩祖以来の徳沢を受けたものはみな、この意を汲んで力をあわせて戦争になったらすみやかに賊徒を滅ぼし、武威を天下に耀かすことを期して、日夜肝に銘じ、一瞬たりとも忘れず国論を統一して全員一致すれば我公の誠忠が神明のご加護に於て青天白日の身となられること疑いはない。死んだら崇り神となつて奸賊を滅ぼすという気持ちのないものは、神よそれらの方を殺して下さい。

大坂からもたらされた親書がどのような内容だったか、それは分からないが、ここに見られる内容は、明らかに総決起を促すものである。戦争になったら「関東の力を戮せ、義兵を挙」げるといふことには、京坂の事態が、西国諸藩の横暴によつて引き起こされたという認識がはつきり示されているということでも、以後の会津藩と東北諸藩の運命に関わる重大な意味をもっている。この時期の会津藩は、徹底抗戦という意識がみなぎっていたということがよく分かる。この後会津藩は年頭の札を停止し、国境を厳守することになったという。会津藩の国元では、慶応三年の暮れにはすでに臨戦態勢に入ったということである。

ある。

## 十七

十二月二十六日には、足利將軍木像梟首事件の犯人・大庭恭平らが、禁錮を解かれる。(『復古記』) 事件発生当事朝廷では意見が紛糾していたが、秋月ら会津藩士が法理に基づいて逮捕した。取り扱いに苦勞した犯人たちが、「政令御一新」で免罪となった。正義を示す指針が、この時京都守護職として会津藩が示したものと正反対になったのだ。会津藩を取り巻く状況の変化を示す象徴的な出来事といえるだろう。この日、京都から徳川慶勝、松平慶永が、大坂城に来て、辞官納地の具体化のため慶喜の上洛を要請した。二人は、周囲の刺激を避けるため入京の際は極力軽装、少人数でと釘をさす。慶喜は、着々とその準備を始めた。

薩摩藩邸焼き討ちの情報が大坂の旧幕府関係者の元に届いたのは、十二月二十九日のことだった。大目付滝川播磨守(具拵)、勘定奉行並小野内膳正(広胖)ら幕臣が汽船で大坂に到着して、江戸における薩摩藩を拠点とする暴徒の横暴、犯人追及のため薩摩藩を焼き討ちにした事件の詳細を伝えた。滝川は有名な主戦論者だったから江戸における薩摩藩関係者の悪行を縷々述べ、関東の形勢は、討薩が当然という風潮だということで、慶喜がこれまで恭順の方針を貫いてきたので、洪々それにしたがってきた在坂の旗本の諸隊・会桑二藩の悲憤が一気に高まって鼎がわくような大騒ぎとなって、上下こそつて慶喜に出兵を迫った。この間の事情は、『徳川慶喜公伝』『丁卯日記』等に詳しいが、ここでは『京都守護職始末』をあげておくことにする。

此報大坂に達す。是に於て内府忿怒に堪へず。薩摩藩密に兇徒を使喚し関東を擾り、東西相応して事を挙げんとす。乱逆を企つる罪恕すべからずと、即夜老中及び我藩、桑名藩等の重臣と会して、其罪状を具申し、典刑を正さん事を奏請するの議を決し、入

京の部署を定む。

慶応四年一月初頭、大目付滝川具挙は徳川慶喜の無罪を訴え薩摩藩を訴える討薩表を持って、旧幕府軍の先鋒を率いて大坂城を出発した。焼き討ち当日薩摩藩邸から逃亡した江戸騒擾事件の関係者たちも同じ頃京都の薩摩藩邸に逃げ帰っていたはずで、この出兵は、薩摩藩の思うつぼだったのだ。慶喜の方には戦争を仕掛けるつもりは毛頭なく、理非を論じて解決に至らせる方針だったはずだが、薩摩藩の挑発にうまうまとのせられたというところだろう。京都に向かう途中、滝川の先鋒隊は鳥羽の関所を守る薩摩藩士椎原小弥太と問答の末、薩摩藩陣地から発砲される。鳥羽・伏見の戦いは、この発砲の瞬間から始まったのである。

この項終わり

二〇一八年五月二十日